

---

『SWORD OR SCYTHE』

稲木グラフィアス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『SWORD OR SCYTHE』

### 【Nコード】

N6184Y

### 【作者名】

稲木グラフィアス

### 【あらすじ】

その世界には、大きく分けて魔族、獣人族、魔法族の三種の民族が存在していた。

魔王の長は世界を手にしようと勢力を拡げていた。

そんな世界の中で、人工的に能天使の加護を受けさせられた少年、  
久也。

大好きだった女の子を失ってもなお『強くなる』という約束を果たそうとするため、軍の特殊育機関で力を追い求める。

追い求めた先に何があるのか。

約束を果たした後に待っているものとは何か。  
不定期更新ですが、なるべく早く更新したいと思います。

## 第一話『殺戮兵器』

「大丈夫、さやちゃん？」

「ひっく・・・ごめん、僕が」

孤児院でいつも一緒だったほのかちゃんはとても優しくかった。

「よしよし、泣かない泣かない。大丈夫だから」

「でも」

「じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね」

「うん、約束する！」

こういった具合に、ほのかちゃんは泣いている僕を慰めてくれたりした。

こんな関係がいつまでも続くと当時は思っていた。

「とくしゅのうりよくかいはず？」

ある日、僕は友達ほのかちゃんと一緒に遊んでいた。そこを白衣を着た男の人が近づいてきた。

「ほのかちゃん、特殊能力の研究をしたいので、ついて来てくれな

いか？」

「ほのかだけ？」

「そうだけど？」

その時、僕はほのかちゃんが、帰って来なくなるような気がした。だから、

「僕も行く！」

そう言ってしまった。

僕達は孤児であったため、孤児院に入っている。

すでに孤児院からほのかちゃんを引き取る事を許可されていたらしく、僕は無理矢理ほのかちゃんについて行った。

「さやちゃん見て、ほのか達と同じ位の子がいるよ」

「本当だ。後で皆で遊ぼう」

「うん！」

先生についていくと何処かの研究施設に着いた。施設の中には僕達と同じ位の歳の子供がいる。

施設に入っつてすぐに初めの能力実験に入った。

実験が一段落すると同じ実験を別の子にもする。その間、他の子は皆で遊んでいる。

そして、全員の実験を終えると、数日休んで二番目の実験にうつる。

そんなことを繰り返していくのだった。

そして月日が経ち、俺は14歳になった。

先生の実験は日に日に被験者にかかる負荷が増していった。

そう。被験者に傷をつける程に。

「・・・・・・・・っ!」

「ほのか!?!」

ほのかの体には、沢山の包帯が巻かれており、とても痛々しかった。

俺にも巻いてあるが、ほのか程ではない。

それどころか、ほのかの包帯はうっすらと赤色が、つまり血が滲んでいた。

「大、丈夫。傷が少し痛んだだけだから」

そう言っているほのかの顔は痛みに歪んでいる。

「だけじゃないだろ! 血が!」

「心配性だなあ、久也は。・・・・・・・・小さい頃に約束したよね?

強くなるって。同じ実験をしているんだもん、久也が大丈夫なら私も大丈夫だから」

「でも！」

俺は声を張り上げた。強くなる以前にほのかにいらなくなってほしくなかったから。

「先生の実験を終えて、強くなった久也の姿を見せてよ」

「……………くっ、分かった。約束する」

俺の頬を涙が伝う。

「ほら、泣かないで。泣いていたら、強そうじゃ……………ない……………」

そこまで言っただけのほのかは力無く倒れる。

「ほのか？ 先生っ！ 先生えっ！！」

俺が叫ぶと先生達はすぐにかっつけて、ほのかを何処かの部屋につれていった。

そして、しばらくして部屋から先生達が出てくる。俺はすぐに先生に聞いた。

「先生、ほのかは？」

「大丈夫、少し体調が悪いたけだから」

「治るんですね？」

先生はもう一度「大丈夫」と言う。

しかし、俺の中では嫌な予感がしていた。

「じゃあ、久也君。ほのかちゃんが治ったら、強くなった君を見せてあげられるように、最後の実験、頑張ろっか」

「……………はい」

そうして、最後の実験を受ける。

最後と言うだけあって、体にかかる負荷は結構なものだった。

「……………うううっ！！」

「辛いかい、久也君？ だけど、我慢してくれ」

しかし、決して弱音は吐かなかった。

ほのかに、強くなった所を見てもらいたかったから。

結果的に言うど実験は成功したらしい。

先生達の様子を見てわかる。

それに、証拠として自分の手に剣が出てくるイメージをすると、白い剣がだせるようになった。

剣と言っても両刃ではなく片方にしか刃がなく、それでも刀に似た形状をしていた。

「強く……………なつたんだよな？」

俺は「うんっ」と自問自答した。

「ほのか、見たらどをんな顔をするかな」

見回すが、周りには誰もいない。

俺は先生を探す事にした。

勿論、ほのかの様子を聞くためだ。

「先生、何処にいるのかな？」

探したが見当たらない。

歩き回っていると一つの部屋に行き着いた。

「ここは……………」

そこは先生達が、入ってはいけなと言っていた部屋だった。  
残っている部屋はここだけなので、入ってみることにした。

コンコン……………。

返事がない。

俺はドアに手をかける。

ガチャツ……………。

「開いてる？」

入ってはいけなと言うわりにはなんて無用心なだろう。

俺は部屋の中に入ったがその中に入ったのは

「何だよ………これ」

中には化け物のようなモノがいた。

「オオオオオオオオオオ」と鳴き声のようなものを発している。

「………うえっ」

あまりの見た目に吐き気を催す。

人型でありながら奇形のように顔のような部分が至る所から飛び出しているのもあれば、アメーバのように形が不定形のものもある。

最初は魔物かと思ったが、人型で服を着ているものがいた。自分とおなじ格好だ。

「………これって」

「おやおや、随分と失礼な子だね」

後ろから先生の声が聞こえたので振り替える。

先生はニヤリと笑っている。

「………先生」

「君と一緒に遊んでいた子のことも忘れたのかい？」

「遊んでいた？」

この化け物の山が皆、人の子だということのか！？  
いや、待て

「ほのかは！？」

「『ほのか』？」

先生はしばらく考えて、思い出したように言う。

「ああ、あの不良品の事か」

「……不良品？」

俺は何が何だか分からなくなった。

ただ、ほのかに会いたかった。

そうでないとうとうにかなってしまいそうです。

「何処？ ほのかは何処？」

先生は相変わらずニヤニヤと笑っている。

やめろ。そんなふうに笑うな。

そう思った俺に先生は、

「ゴミはどうするか、わかっているだろう？ 君以外はまったくの  
ゴミ素材だったよ。『実験の負荷に耐えきれなくなったゴミ』や『  
実験で細胞が崩壊して化け物に成り果てるゴミ』とかね」

やめる。ほのかはゴミなんかじゃない！

「ここまでの道のりは長かった。」

先生は呟く。

「期待していたサンプルも駄目になり、私達の実験は失敗に終わるのかと思っただが、ようやく完成品を手に入れることができた。」

「俺達に何をした？」

俺がそう言うと、先生は背を向ける。

「君は『九天使の加護』というものを知っているかい？」

九天使の加護。それはその名の通り天使からの加護のことで、天使の第一位から第九位、つまり熾、智、座、主、力、能、権、大天使、天使からの九種類の加護がある。

九種類の加護にはそれぞれ違う能力があり、それぞれがとても強力な加護である。

天使の加護は15年に一度、世界中の九人の子供がそれぞれの加護を受けて生まれてくる。

「私達は九天使のなかで最も戦闘向きの加護、能天使の加護を人工的に受けさせる研究をしていたんだ」

俺は何も言えなくなっていて、ただ先生の話聞いていた。





そこからは、逃げる先生達が一人づつ真つ二つにされていくとい  
う殺戮が始まった。

「うくっ………っ」

俺は雨が降る中、1人泣いていた。

『よしよし、泣かない泣かない。大丈夫だから』

そんな中、

ほのかの言葉が浮かんでくる。

「ごめん………俺が助けるって約束したのに。守ってやれな  
くて……ごめん」

『じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね』

「うん、強くなる。……誰よりも、絶対に」

だから、見ていてくれよな。

「約束………な？」

俺の頬をつたう液体はもう、涙ではなくなっていた。

## 第一話『殺戮兵器』（後書き）

学生なので更新が遅くなりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

水面さんの感想を参考に改稿しました。

『水面さん』の感想を読ませていただきました。参考にさせていただきますました。

ありがとうございます。

## 登場人物設定『主人公』

名前：楠木 久也くまき ひくや

容姿：（15歳時）黒髪ショートヘア、黒眼。背は168?。

武装：純白の剣

漆黒の鎖鎌

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃） 軍の特殊育成  
機関から支給される銃。

人工的に能天使の加護を受けさせられた少年。大好きだった女の子、『ほのか』を人工的に能天使の加護を受けさせるという研究で失い、その怒りに身を任せて研究に携わった人を殺し尽くし、その研究所をも完全に破壊した後、『エドワード・グレイス』に拾われる。

> i 3 5 5 0 4 — 4 4 6 8 <

## 登場人物設定『主人公』（後書き）

楠木久也の容姿が書けました。自分のイメージ的にこんな感じですよ。

この他に学校で友達と一緒にリレーで書いてる『GATE』って作品でもナナと光というキャラも書きました。そっちの方も読んでください。

## 第二話『家族』

「・・・・・・・・」

俺は雨の降るなかを歩いていた。

冷たい雨は体温を奪い、疲労を与える。

研究所を破壊した後、俺は町を目指していた。

道を歩いていたら魔物が飛び出してきたので、今も白い剣と黒い鎖鎌は手に持ったままだ。

しばらく歩いていると、滝が流れている所に出た。

滝の裏は大きく窪んでいて、雨を凌ぐには充分だった。

空は灰色から黒に変わり始めていて気温は更に下がっていた。

明日、この川を辿っていけば人の居るところに着くはずと思い、俺はこの窪みで一晩を過ごすことにした。

火が欲しい所だが、木の枝は雨で湿っているし、上手く火を起さず自信がない。

仕方ないので、窪みの奥の方で丸くすることにした。

「おやす・・・・・・・・」

そこまで言って気がつく。

「誰も・・・・・・・・いないんだよな」

孤児院にいた頃はほのかが『おやすみ』といって、俺も同じように返していた。研究所にいた時も。

冷たい雨、湿っぽい地面。

聞こえるのは滝が流れ落ちる音と雨の音。

「……………」

相当疲労が貯まっていたのか目を閉じると、すぐに眠ってしまった。

チュンチュン

「ん？」

俺は太陽の光で目を覚ます。

しかし、何故か冷たい地面で寝ていた筈なのに、俺の体はとても暖かった。

「……………っ！」

完全に覚醒する。

俺は何処かの家の中のベッドに寝かされていた。

「……は？」

いつの間にか着ている服が変わっている。

ベッドから身をお越し、周りを見渡す。  
だが、誰もいない。

ガチャッ

ドアが開く音がした方向に身構える。

「そんなふうに身構えないでちょうだい」

部屋に入って来たのは女の人だった。  
もしかしてこの人が俺を助けたのか？

「……………」

「警戒しなくても大丈夫よ。とって食う訳じゃないんだし。……………  
…はい、まずはこれ食いな」

その女の人は俺にスープが入った皿とスプーンを出してくる。

「……………スープ」

「冷めない内に食べなよ」

研究所を破壊した後から何も食べてなかった俺は腹が減っていた  
ので、そのスープを喜んで頂いた。

「まる二日寝てたからお腹すいたでしょ」

「まる二日!?!」

あんなところで寝てたからだろうか。

もし、助けてもらえなかったら、あそこでどうなっていただろうか。

「食べながらでいいからさあ」

その女の人はスープを食べているのを見ながら、質問する。

「なんで、滝の裏なんかで寝てたのさ?」

「それは……………」

俺は研究所ことを話そうとした。

しかし、信じてもらえるだろうか。

話した所で

『冗談言つんでないよ』

と、返されそうだ。

「えっと、道に迷って」

「ふん?」

女の人は俺に疑いの目を向ける。

「冗談言つんでないよ」

俺の嘘はバレていた。

「嘘つくと、すぐに分かるんだから。伊達に母親やってないよ」

嘘をつくとすぐに分かるとなると本当の事を言うか、黙秘しかないか？

研究所にいた頃から思っていたけど、あの研究所は小さいものはなかった。

ならば、それなりの研究資金が必要だ。

それに、あんな研究施設を魔人族が放って置くはずかない。

たまたま、見つかっていなかったからかもしれないが。

「疑いませんか？」

「聞いてからにするよ」

「.....」

そんなことを言われたら言いにくくなるじゃないか。

「冗談よ、信じてあげるから」

「はい」

俺は研究所の事、その研究所を破壊した事を話した。

しかし、天使の加護のことは伏せておいた。

話を聞いた女の人は「ふうん」と納得した表情をした。

「もしかして、あれの事かな？」

そう言うと、女の方は部屋を出ていく。

俺はその内にスープを食べきった。

「……………ふう」

ガチャッ

俺がスープを食べ終わると同時に女の方が部屋に入ってくる。

今度は新聞を持っている。

「あなたが言った研究所ってこの事？」

そう言って、女の方が持ってきた新聞には見覚えのある風景が載っていた。

しかし、天使の加護云々ではなく、魔族に対抗する新型兵器の研究と記載されている。

一般に公開したくないのだろう。

「違う」

「そうなの？」

「いや、俺が破壊したのはこの写真の研究所だと思います。見覚えがありますし。でも、俺が破壊した研究所が研究していたのは、天使の加護を人工的に受けさせるというもの……あ」

しまった、言ってしまった。

なんで今、言っちゃったんだ？

バンツ！！

「今のは本当か!？」

いきなり男の人が部屋に駆け込んで来た。

「あんた」

「君、今言ったことは本当なのか？」

男の人は凄い勢いで詰め寄って来る。

女の人が『あんた』と言ったあたり、男の人と女の方は夫婦なのだろう。

「えっと……あの」

「こら、あんた。この子も驚いてるじゃないの」

「す、すまん」

どうしようか迷っていた俺を見て女の方は、俺に詰め寄っていた

男の人を俺から離す。

「えっと、天使の加護のことは本当です。俺は能天使の加護を受けています。」

証拠のために白い剣を出して見せる。

それを見て二人は目を見開き、開いた口が塞がらないといった様子になっていた。

「うーん」

「な、なんです？」

男の人はなにやら考え始める。

「天使の加護を受けている人は珍しくない。でも、君の話だと君自信、裏の事情を知っている事になるね」

「はい……」

やがて、夫婦二人でなにか話し始めた。

すると二人の意見が一致したように同時に頷く。

「なら、ここにいい」といい

「はあ!?!」

予想外の言葉に声が裏返る。

何を言い出すんだこの人は。

裏の事情を知ってしまった俺の存在を、その裏の人が知ってしまったら何をされるかわからない。

勿論、俺を匿ったりすればただではすまないだろう。

「なんで、そうなるんですか？」

「大丈夫だ。私はこれでも軍の特殊育成機関の教官でね、君ひとり増えてもちゃんと家族みんなで十分な暮らしはできる。」

「そんなこと聞いてません。なんで、俺を匿うんですか？」

まあまあと女の人が俺を落ち着かせる。

そして、食べ終えていたスープの皿を片付けた。

「私はそこまで偉い立場じゃないから君を助けてあげられるのはほんの少しだけ。残りは自分でどうにかすることだ。君は天使の加護を受けてまだ間もない。なら、私がいる軍の特殊育成機関について、力をつけたらどうだ？」

「だから、なんでそこまで？」

「私はね、面倒なことに首を突っ込むのが好きでね」

「そうよ。この人は昔からよく面倒事に巻き込まれるの。でも、退屈しないわ」

夫婦二人はどう意見のようだ。

完敗だ。なんて、返したらいいか分からなくなった。

まあ、断って出ていっても止められないだろうが、どこにも行く宛がないのでお世話になるのは結構だ。

それに、強くなるために軍の特殊育成機関で力をつけるのはいいことだ。

「ありがとうございます。えっと」

「エドワード・グレイスだ」

「サニー・グレイスよ。後、娘のモニカがいるわ」

「あ、はい。楠木久也です。今後、よろしく願いします」

## 第二話『家族』（後書き）

主人公設定のところに主人公のイメージを書きました。

### 第三話 『試験勉強 接近戦闘編』

俺がグレイス家にお世話になって1ヶ月がたち、エドワードさんが言った軍の特殊育成機関に入るため、入隊試験の勉強をしていた。

「はああああ！」

俺は今、グレイス家の一人娘モニカと一緒にエドワードさんに試験の第一科目『戦闘技術』について教えてもらっている。

俺達は木剣を使っていた。

モニカは俺と同じ年らしく、親が教官なので、軍の特殊育成機関に入るため練習をしてきたらしい。

「そこっ！」

俺は大振りなモニカの間をついて木剣をモニカの脇腹に叩き入れる。

一応、革の鎧を身に付けているが多少の痛みが伴うはずだ。

「くうっ！」

苦しそうに顔を歪め、踞るモニカ。

「大丈夫か！？」

「モニカ！？」

俺とエドワードさんは心配して駆け寄る。  
すると、

「隙ありっ!」

反射で避けようとするのがモニカの木剣は俺の脛に当たり、『力  
コーン!』と乾いた音が響いた。

「いっつったああ!」

俺はあまりの痛さに転げ回る。

「足がああああ!」

弁慶の泣き所を木剣で思いっきり叩かれたのだ。痛くない何て言  
うやつがいても俺は信じない。

「油断禁物って事よ」

「卑怯な!」

「戦争にはルールがないのよ」

なんてやつだ。

分かった。そっちがその気ならこっちだって、

「モニカ! もう一度勝負だ」

「いいわよ、受けてたつわ。その代わり負けた方は何でも一つ、勝  
った方の言うことを聞くこと!」

「俺はいいぜ。いいですよ、エドワードさん？」

このやり取りは一週間程前から繰り返していた。

やり取りの発端はモニカからだった。

今と同じように戦闘技術を教えてもらっているときに、なんとモニカは俺に向けて木剣をぶん投げてきた。

とっさの事に反応できず、木剣は俺の顔面に直撃。

そこからは、怒った俺がもう一度といって、あのやり取りになる。

「いつもの事だろ？ どうぞ」

エドワードさんは何気無い顔で言う。

エドワードさんは最初は止めたが、俺達の勢いに負けて、今ではこんな感じだ。

「その約束、後悔すんなよ？」

「その言葉、そのまんま返すわ」

俺達是对峙して睨み合う。

数秒の間の後、先に動いたのはモニカだった。

「ええええい！」

「はっ！」

俺はモニカの斬撃を木剣で受け止める。  
競り合いながら俺達は睨み合う。

「いつもこのパターンね」

「なら変えてみたらどうだ？」

「言われなくてもっ！」

モニカは木剣を弾くと、今度は木剣を横に薙ぐ。

「くっ！」

俺はそれをバックステップで躲すと、今度は俺から斬り掛かる。

モニカは体を反らして躲し、距離をとる。

「今日は調子がいいわ」

再び対峙する。

俺の斬撃を躲すのはいつもの事。

しかし、そこから距離をとるのは初めてだ。

「今度は俺からっ！」

俺は木剣をしっかりと握ると、モニカに斬り掛かる。

モニカはそれを弾くと、今度はモニカが斬り掛かる。

しかし、俺は弾かれた後、一定の距離をとったので、モニカの斬撃は空を切った。

「あつぶね」

「そつちもパターンを変えたのね」

「当たり前だ。パターンを変えた相手に合わせて、変えてるからな  
っ！」

俺は木剣を横に薙ぐ。

モニカはそれを弾いて斬り掛かろうとするが、俺の体は再び一定  
の距離をとっていた。

ヒットアンドアウェイというやつだ。

「何逃げてんのよ!」

「逃げてないぞ? 立派な戦術だ」

「ヒットアンドアウェイね。面倒な真似を」

そう言うと、モニカは木剣を構え直し、「ふう」息を吐く。

「来なさい!」

「そう言われなくてもそのつもりだ」

俺はモニカに斬りかかる。

だが、今度は離れるつもりはない。

「おりゃあ!」

「ふっ！」

モニカは俺の斬撃を躲す。

それに合わせて俺は慣性の法則に逆らい、モニカに斬りかかる。

「もらった！」

「……………」

しかし、モニカはそれも躲す。

「なっ？」

「えええい！」

俺の木剣はモニカの斬撃で弾かれる。

モニカの攻撃は大振りだが、一回集中すると集中が途切れるまでは、物凄い反射を見せる。

それを忘れていた。

モニカとの戦闘で一番気を付けなければならない所だというのに。

俺はその動きに反応できず、モニカの木剣が胸部に当たる。

「うぐっ！」

俺は胸部の痛みに踞る。

「私の勝ちね。さて、何をさせようかしら」

モニカは俺に勝った余韻に浸りながら『約束』の事を考える。

モニカが踞った時に心配して駆け寄るじゃなかった。

二重の意味で。

「もう少し敗者を労ったらどうだ？」

「何よ。負け惜しみ？」

この女〜！（怒）

「これで勝ったと思うなよ！」

「それ、負け役の台詞」

ぐっ、言い返せん。

だが、今度勝負する時は負けないように対策を練っておくか。

モニカの集中した時、どうやって気を逸らすかか？

こうして、負けた方は次にどうやって勝つか、勝った方は負けな  
いように練習をする、というのを繰り返していくのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6184y/>

---

『SWORD OR SCYTHE』

2011年11月26日14時56分発行